

岡村 幸宣 氏 (高校45期)

東京造形大学造形学部美術学科比較造形専攻卒業、同研究生課程修了。

《原爆の図》をはじめとする丸木位里・丸木俊夫妻の絵画研究を軸に、戦争や社会的テーマを扱う芸術の展覧会企画も手がける。

「3.11」後には、核に対峙する芸術の歴史を見つめなおし、『非核芸術案内』（岩波書店、2013年）を刊行。

2015年10月末には、戦後の占領下に全国170カ所を巡回した「原爆の図展」の実態をまとめた『《原爆の図》全国巡回—占領下、100万人が観た！』を新宿書房より刊行。

主な共著に『「はだしのゲン」を読む』（河出書房新社、2014年）、『3.11を心に刻んで2014』（岩波書店、2014年）、『山本作兵衛と炭鉱の記録』（平凡社、2014年）など。



立川高校の思い出は、野球部の記憶が圧倒的です。3年間の選手生活では飽き足らず、大学進学後も2年間助監督として母校に通い、最後の夏の西東京大会では、野球部の最高成績となる準々決勝に進出できました。お世話になった仲間たち、先輩後輩、先生方には感謝の思いしかありません。今でも、ふと「あのとき、ああすれば……」と高校野球の夢を見ます。



野球部公式戦 対三鷹高校
背番号8が岡村氏



1952年8月に立川南口公会堂で
開催された「原爆の図展」



2015年6月ワシントンD.C.で
開催された「原爆の図展」



著書『《原爆の図》全国巡回—
占領下、100万人が観た！』

学校生活では、本当の意味で「学ぶ」とはどういうことかを考える3年間でした。第2外国語でフランス語を専攻して英語以外の言語に触れたこと、自主講座で美術の授業を成立させようと友達を誘って何とか人数を確保したことも、懐かしく思い出します。

大学では、美術館の学芸員になるための勉強をしました。当時は授業で学ぶ最先端の美術館活動が眩しく見えたが、流行と無縁の美術館も見ておきたいと考えて、埼玉県東松山市にある《原爆の図》を描いた丸木位里・丸木俊夫妻の私設美術館を実習先を選びました。最初に頼まれた仕事は、竹の子掘り。授業と違う体験をしたいと考えてはいたものの、想像以上の落差でした。それがかえって新鮮で、実習後もボランティアとして通い続けました。

大学卒業後、研究生課程を終えて、自転車に乗って半年ほどヨーロッパを旅しました。自分の足で各地の美術館を見てまわり、文化の本質を見つめたいと考えたのです。心を打たれたのは、小さな町や村の美術館が、それぞれの地域の芸術を、大切に伝えていることでした。本当の文化とは、私たちの生活の足もとから生まれる、その場所でしか発信できないものなのだと気づいたとき、丸木美術館の存在がそれまでと違って見えるようになりました。

《原爆の図》は、等身大の人間の痛みが描かれた絵画。核という禁断の力に抵抗し、生命の尊厳を考え続ける美術館は、唯一無二の存在です。

2001年から学芸員を務めていますが、この美術館にとって初めての学芸員だったので、ひとつひとつ仕事を整備し、積み上げていく15年間でした。高校生の皆さんには、すでにある見栄えの良い椅子を奪取するだけが「就職」ではなく、何も無いところに自分で椅子を作っていく道もあるのだと、知って欲しいです。

原爆投下から70年目の今年は、ワシントンD.C.をはじめ、ボストン、ニューヨークの米国3会場を巡回する展覧会に携わっています。毎月のように米国に渡り、広島・長崎で対談やシンポジウムに参加したり、高校や大学で出張授業をしたりという慌ただしい日々ですが、仲間と汗を流した高校時代を思い出しながら、乗り越えています。ボストン大学では、《原爆の図》について講演をしました。高校のとき、もっと真面目に英語を勉強しておけばよかったと後悔しましたが、人生、何が起きるかわからないものですね。

時代を超えて過去の戦争の記憶を語りつぐことは、簡単ではありません。しかし、人びとの悲しみの歴史を知ることは、単に過去の事実を学ぶだけでなく、私たちが命をどのようにとらえ、どのように生きていくかを考えるための、大切な道標になると信じています。

原爆の図 丸木美術館のHPはこちらです。 <http://www.aya.or.jp/~marukimsn/index.htm>